
奇悪伝

勿論西村

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

奇悪伝

【Nコード】

N6600W

【作者名】

勿論西村

【あらすじ】

海洋高校1年の安久は入学式から問題を起こしてしまう
そのせいで不良から絡まれることに・・・

奇恵明王登場

奇恵明王^{きゑくみょうおう}——俺がそう呼ばれ始めたのは

高1の入学式からだった

中学の時はそこその成績で

決して喧嘩などはしなかったダチも結構いた方だと思う

潰瘍高校^{かいようこう}入学式

サクラが舞散る4月だった

「やっべえ遅刻だ」

入学式、初っ端から遅刻。最悪だ

走って学校に向かう

学校に着いたところには

入学式が終わっており皆各クラスに行き

自己紹介的なのをやっていた

そろそろと教室に忍び込む

「安久あく!!」

先生が俺の名を呼ぶ

それに驚き立ち上がる

「スイマセン。」あやまり席に着く

一日が終わり

下校しようと鞆を持つ

校門付近で何かにつまづいた

「なんだ？」

ふと下を向くと

一本の木刀が落ちていた

それを手にすると

ふと記憶がよみがえる

「ひ、ひい　ごめんなさい」

座り込む小学生くらいの男の子

自分の手には木刀があつた

うう頭を押さえる安久

頭を押さえながら歩く

するとどさつ誰かにぶつかった

「おい坊主、どこ見て歩いてやがる」

海洋高校2年 神戸一成こうへいせいだった

彼は学校でも有名な不良

校門の前で問題起こすのはヤバいな

「下見て歩いてました」

と言って通り過ぎようとする

しかし肩を掴まれた

それを電柱の陰から見ている人がいた

見ているだけで何もできないだろうな

するとその人がこっちに近づいてくる

「スイマセン。俺のダチが失礼なことして」

と言っていきなり頭を下げ出した

「ああ？」

神戸がその男の方を見る

「お前らなんちゅーもんじゃ？」

そう言つと安久とその男の方を見て言う

「俺はさいとうたかや斎藤貴也ツス」

そう言つと神戸が安久をじろつと睨む

「お前に名乗る必要はない」

思ってもいないことを言ってしまった安久

それにカチンをきた神戸が安久を殴り飛ばす

「チッ」舌打ちすると手に持っていた木刀を構える

神戸がスタンガンを取り出した

「おいおい。神戸さんに喧嘩売るなよ」

と貴也が肩をたたく

しかし安久はそれをはらうと

木刀でスタンガンをはじく

と素早く神戸の腹の中に入り込み木刀で突き上げた

「グフツ」と倒れ込む

座り込む神戸に木刀を振りあげる

「ひ、ひい 奇悪明王だああ」

頭を抱える神戸

その姿を見て記憶がよみがえる

木刀を下しその場を立ち去った

それを追う貴也

「なぜ付いてくる。」

「いやなんとなく。お前ダチいなそうだから。」

それを聞きコツンと木刀で小突く

貴也が笑いながら帰って行く

それを物陰で見っていた人がにやりと笑う

「へえ面白そう」

その人影はスキップしながら帰って行った

「ところで奇悪明王って何だろ？」

購買部事件

入学式から問題を起こした安久は

職員室に朝っぱらから呼び出された

「いいか。あんまり問題を起こすな。起こし過ぎると退学になるぞ」

先生の話テキトーに聞きながし

職員室をあとにする

職員室から教室に向かう途中

周りの目が冷たい目だ

こつちを見て、こそこそ話をしている女子。

目を合わせようとしない男子

さらに先輩からはガン飛ばされる

まあ仕方ないか

そう思いながら教室に入ると

今まで騒がしかった教室が一気に静まり返る

「チッ」と舌打ちをすると席に着く

するとそこへ誰かがやってきた

「よっ！おっはよ」

昨日のやつだ

「ああ。誰だっけ？」

そうつぶやくと

驚いたように奴は自分を指さし名を名乗った

「俺は貴也だよ！俺はお前を知ってるぜ。安久朴斗」

しかしそれを無視するように

安久は顔を伏せた

昼休み――

「おい、安久購買行くぞ！」

そう安久に話しかける

それを聞いて立ち上がる安久

「急げ！はやくいかないと！」

貴也がせかす

しかし安久はせかしている理由がわからない

「どうした、そんなに急いで」

それを聞いて

はあとため息を漏らす

「いいか、この学校は購買で売られている量が限られている

しかも大食いな奴ばっかだ

そこからわかるのは。急がないとなくなる！！」

それを聞くなり安久は急ぎだした

「おいそつ言つのはやく言えよ！」

貴也も安久を追いかける

購買部――

もう既に多くの人間が購買にいた

「うわー噂以上だ」

そう貴也がつぶやく

それを見て安久が肩を回す

「みんな気合いはいつてんな」

そう言う人と人ごみの中をはいって行く

皆の後ろで大きく手をたたく

パチンツ

すると人が驚き道が少し開く

次々とパチンツと鳴らし

道をつくり進んでいく

「すげえ」

それを見ていた貴也がそうつぶやく

すると安久が袋を持って人ごみから出てきた

それに駆け寄る貴也

「お前すごいな。」

そう安久に言っと、コクンとうなずき

「これはな、前見たテレビドラマのパクリだ」

そう言っと安久がそつと袋の中に手を入れ

貴也に焼きそばパンを渡した

するとまだ絶えない人ごみに

竹刀をもった大男が近寄って行く

「おい、お前等 買ったもん全部出せ！」

パチンツと竹刀をたたきつける

ほとんどの人がその大男にパンとかを渡す

逃げる者は大男の仲間に捕まえられる

それを焼きそばパンを加えながら見る安久

するとずかずかと大男が近づいてくる

「おい、お前その袋をこっちに渡せ」

出海堂大樹——購買周辺がテリトリーの不良

出海堂をギツとにらみ安久が

「い・や・D E A T H !」

そう大声で言うと

皆がササ——と離れていく

「お前、誰に喧嘩売ってんだ？」

出海堂が竹刀をパチンとたたきつける

しかし何とも動じない安久

その後ろで貴也が身をひそめながら見ている

すると安久が貴也に向かって手を伸ばす

まるでリレーのバトンをもらうかのように

それを見てハッとした貴也が教室に走る

「おい！聞いてんのか？」

出海堂が大声で怒鳴る

「いや聞いてますけど、なんて返していいかわからなくて」

そうボソツと言うと

出海堂が腕をくみ

「確かにもしお前が俺に喧嘩売ってなかったら、悩むな」

悩みだすしかしハツときづく

「いや お前は俺に喧嘩を売っている！」

するとそこへ貴也が戻ってきた

戻ってきたと同時にシュンツと何かをなげた

パシッとキャッチする そして持っていた袋を貴也に投げる

安久の手には木刀だけがあった

「後悔するぞ」

そう出海堂が言うと安久に竹刀を振りかざす

バツ それを木刀で受け止める

竹刀の重さで少し腰が落ちる

しかし安久がニヤツと笑い竹刀をはらう

そのまま出海堂の腹を木刀で突く

「グハッ」と倒れ込む出海堂

「お前が 奇悪明王!？」

それを聞くと木刀を下す

出海堂に背中を向け

「おい、奪ったもん全部返しとけよ」

そう言うとき貴也の方へ向かった

その瞬間静まり返った購買がワーワーっと一気に騒がしくなった

二人のもとへ一人の少女が近づいてくる

「もーダメでしょ問題起こしちゃあ」

腰に両手を当てている少女は

C組の加峰百だった

「また職員室に呼ばれちゃうよ？」

完

購買部の事件翌日、安久は職員室に呼び出された

「ハイスイマセン。俺退学っすか？停学っすか？」

ぺこつと頭を下げ担任の田原正康の顔を見た

すると田原は目を閉じ首を振った

「これを見る」

すると田原は鞆からドサツと大量の紙の束を出した

それをぱらぱらめくる

するとそこには安久への感謝の言葉、軽罪願いなどが

書き込まれていた

「購買で買ったものを取り返してもらった人達の言葉だこれに免じて今回は許す、みなに感謝するんだな」

「ありがとうございます」

深く頭を下げると職員室を出た

職員室を出ると、目のまえに貴也、百がいた

「おう！」 「みんなに感謝するのよ！」

と安久に声をかける

すると照れくさそうに頭をかきボソツと

「ありがとう」そうつぶやく

それを聞いて顔を合わせニヤツと笑う二人

「そう照れんな！」

後ろからバシッと安久をたたく

「うゝんなにかあいつカッコつけてね？」

武藤来輝、ナルシ不良

昼休み——1年D組

「安久」

バンと安久の机をたたく

顔を伏せていた安久が顔をあげる

するとそこには百の姿があった

「んだよーお前C組だろ？消えろ」

それを聞くと百がぷくぷくと膨れ安久の耳元でワ——と叫ぶ

それを食らった安久は飛び起きる

「何すんだ！？うるせーだろ！」

「ねえ購買いかないの？」

「ああもうあんな面倒なこといやだから、コンビニで買ってきた」

とコンビニの袋を取り出す安久

それを見てまたぶくぶくと膨れる百

「ねえじゃ……」バンツ!!!!!!

教室の扉が大きな音を立て開いた

それに教室にいた人全員が注目する

「パンパカパ——ン」と言って紙吹雪をまき散らす

髪が長い少年が立っていた

「お前は1年E組の武藤!?!」

百が叫ぶと

「その通りさ ま、このぼくを知らない人なんていないけどね」

髪をはらい格好をつける武藤

それを見ていたみながしらぶとした目で武藤を見る

しかし一人安久だけはまた顔を伏せた

「おい、安久朴斗。なんか僕より目立ってない? そんなのは許さないよ」

そう言つと武藤が安久の机をガンつと蹴りあげる

机が横たわり伏せていた安久が転げ落ちる

「ハハハ！カツコ悪う～～」

安久を指さし笑つ　するとよろつと安久が起き上る

その手には木刀があつた

「こんなとこに来て大声で変なこと叫んでお前の方がカツコ悪いわ
！」

そう言つと武藤に木刀を振りかざそうとする

すると武藤が腰を抜かし座り込む

「ひい」頭を抱える　それを見ていたみながしら～つとした目で武藤を見る

するとそのまま武藤が帰つて行つた

「何だつたんだあれ？」

「さあ」と百も頭をかしげる　すると購買へ行つていた貴也が帰つてきた

「あれ？何かあつたの？」

そう言つとみながしら～つとした目で貴也を見る

「え？俺なんかした？」

すると百が貴也の肩をポンとたたき

「いや、何もしてないから可哀そうだなんてことだ」

そう百が言つと倒れた机を元に戻し

安久がまた顔を伏せる

「あ！そうだ安久！一緒に食べようよ」

そう百が声をかけると

「いや俺もう食ったんで」

そう言つてコンビニの袋を出すとその中にはゴミしか入ってなかった

それを見ていたみながしらへつとした目で安久を見る

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6600w/>

奇悪伝

2011年12月2日17時53分発行